

論文の要旨

論文題目 韓国人日本語学習者のビリーフに関する研究
氏名 呉 禧受
学位 博士(文学)
授与年月日 平成21年2月27日

本研究は、日本語学習に際しての韓国人学習者のビリーフを明らかにすることを目的とする。

本研究で扱うビリーフ(Beliefs)というのは、学習者、または教師が言語学習に対し抱く意識的または無意識的な態度や信念を指す。ビリーフは実際の言語行動の基礎となり、学習に対して強い影響力を持つとされ、学習者の学習過程とその特徴の解明を目的とする学習ストラテジー研究や、学習者の学習傾向を明らかにするための学習スタイル研究の根幹をなす。

ビリーフ調査は、教室内の学習者の多様な学習行動やタイプを特徴付ける有用な方法であり、ビリーフ調査を通じて学習者を理解することができ、自律的学習の奨励、より豊かな教授法の試みなどを可能にする。また、学習者のビリーフを把握することによって、教授者・研究者はストラテジーや実際の学習行動とそれをささえる学習者の内面にある心的態度の関係を把握できるようになり、また学習者は自らの学習行動を客観的に把握し、学習の改善がしやすくなると考えられる。

近年の第二言語習得研究では、学習者自身が外国語学習において積極的な役割を果たすべきであるという考え方が顕著になってきている。そのためには、教師が学習者についてよく理解する必要があるが、ビリーフ研究は学習者について総合的に知り、それをバックアップすることに貢献する。

以下に各章の要旨を示す。

第1章では、ビリーフ研究の必要性と本論文の研究課題、本論文の意義、本論文の構成について述べた。ビリーフ研究は、ビリーフと学習行動・学習成果の関連、学習者のビリーフと教師のビリーフの関連、自律的学習の促進、教授法の適否、教師研修のデータ蓄積などの目的で必要とされている。本論文ではそれを踏まえ、「韓国人学習者の日本語学習におけるビリーフの諸相」、「韓国人学習者のビリーフと学習ストラテジーの関連」、「韓国人学習者のビリーフと学習成果である成績の関連」、「韓国人学習者と教師のビリーフの比較」を研究課題とし、研究を進めた。これまでの学習者研究の多くは各分野の学習者要因を独立した概念で捉えているが、本論文では各々の学習者要因がひとつのプロセス上にあると仮定し、相互に影響を与え合うと見なして考察を行った。その考察を通して韓国人学習者の学習者要因のプロセスの一側面を明らかにできると考えられる。

第 2 章では、ビリーフ研究と密接な関係を持つ言語学習ストラテジー研究について説明した。さらにビリーフの用語の説明と本論文におけるビリーフの位置づけを行った。教師中心の言語教育から学習者中心の言語教育へと教授法が変化し、学習者要因研究が行われるようになった。学習者要因研究の体系的な研究として言語学習ストラテジーの研究がある。ビリーフは言語学習ストラテジーを背後から支える要因である。本論文におけるビリーフを、「学習者、または教師が言語学習に対し抱く意識的または無意識的な態度や信念であり、学習ストラテジーなど実際の言語行動の基礎となり、強い影響力を持つもの」と位置づける。

第 3 章では、本論文の調査対象者、調査方法、調査の場所、調査ツールとしての BALLI (Beliefs about Language Learning Inventory) について説明した。

第 4 章では、韓国人日本語学習者 350 人を対象とした BALLI によるアンケート調査と、アンケート調査対象者のうちの 13 人を対象に行ったインタビュー調査の結果を分析し、韓国人学習者のビリーフについて考察した。

韓国人学習者は性別や専門など、個人が属しているグループによって言語能力に差があるなどの考えをあまり持たず、外国語は努力次第で上手になれるというビリーフを持っていた。また、日本語の学習しやすさに関しては、韓国人には他の外国語に比べて学習しやすいと認めつつも、日本語そのものが学習しやすい言語であるとはあまり思っていなかった。コミュニケーション活動に関しては、コミュニケーションの流れを重視しながら正確さにも注意を払うというビリーフが確認された。誤用訂正重視など、日本語学習において正確さを重視する態度が多く学習者に見られた。日本語学習を始めた当初よりも、日本語学習を進める過程において学習意欲が増進したという意見が多かった。日本や日本文化に対する関心が強く、「日本に行きたい」、「日本人と上手に話したい」などの総合的動機づけが大変強いという結果が見られた。授業中に自然なコミュニケーションを行いたいという願望が強く、日本語学習に留まらず、日本語を媒介にして自分の関心分野や専門についてさらに勉強したいという積極的な態度を持っていることも確認された。

しかし、日本文化への関心が強く、教室活動への参加やコミュニケーション活動に関心を有してはいるものの、実際に教室活動に活発に参加しているという意見は少なかった。その理由として、「誤用の心配」、「日本語の実力不足」、「消極的な性格」などが挙げられた。韓国人学習者の正確さへの拘りや消極的な性格が、活発な授業活動への参加を妨げる要因の一つであることが確認された。

第 5 章では、第 4 章と同一の韓国人学習者 350 人を対象として行った、BALLI によるビリーフ調査と SILL による学習ストラテジー調査について述べた。調査結果に対し、因子分析を施した上、重回帰分析を行い、ビリーフ因子と学習ストラテジー因子間の関連について考察した。

分析の結果、「日本人の友達とたくさん付き合いたい」、「日本語の勉強は楽しい」などの内容を含む『日本語学習に際しての願望と楽しみ』ビリーフ因子がすべての言語学習ストラテジー因子との間で因果関係にあり、「私は授業時間に活発に発言し、参加する」、「私は話

すのが好きであり、他人との会話を楽しむ」などの内容を含む『積極的な言語学習態度』ビリーフ因子は言語学習ストラテジーの4因子との間で因果関係にあったことから、この2つのビリーフ因子が言語学習ストラテジー使用に大きな影響を与えることがわかった。大量の反復練習や暗記に関するビリーフである『正確さの重視』因子は学習ストラテジーの選択に大きく影響する『日本語学習に際しての願望』因子との間で極めて高い相関関係にあった。また『日本語学習に際しての願望』ビリーフ因子を構成する13項目の中にも正確さに関する項目が2項目含まれている。これは韓国人学習者が学習を進めるにあたって「正確さ」に関するビリーフが大きく影響していることではないかと思われる。

第6章では、第4章や第5章とは異なる韓国人学習者93名を対象としたビリーフ調査の分析結果について述べた。調査対象者の担当教師から成績を提供してもらい、ビリーフと成績の関係について考察を行った。分析に当たっての統計手法としては、クラスター分析と相関係数を用いた。

クラスター分析の目的は類似性を持つ集まりを得るためであるが、93名の学習者の成績とビリーフの特徴から5つのクラスターが得られた。第4クラスターと第5クラスターに属する学習者は最も成績がよかった。彼らの持つビリーフの特徴から、「自信を持つ」、「教室内の活動に積極的に臨む」、「教師に依存するより自律的に学習を行う」などのビリーフが日本語学習成果に寄与することがわかった。最も成績が悪かった第3クラスターの学習者のビリーフには、第4、第5クラスターの学習者とは対照的に、「自信がない」、「誤用を恐れる」、「学習者同士の活動を拒む」、「学習とは教師から教えてもらうものである」などの特徴が見られた。

相関係数に基づいてビリーフと成績の関係について調べた結果、BALLI項目のうちの3つの項目が成績と統計的に有意な関係を見せた。それは「日本の文化背景を理解したい」、「日本語で上手に話したい」、「日本語の勉強は楽しい」というビリーフであり、これらのビリーフが強ければ強いほど学習成績が良いことがわかった。

第7章では、韓国で日本語を学んでいる日本語学習者と韓国で日本語を教えている日本人・韓国人教師のビリーフを調査し、その差に注目して分析を行った。教師のビリーフを調査することは、教師自身の自覚を促すとともに、学習者ビリーフとの比較を通じて教育的な調整の手がかりが得られるという効果が予想される。

全体的に見て、日本語母語話者と韓国語母語話者の差(JT対JS、NJS、KT)よりも学習者グループと教師グループの間の差(JS、NJS対KT、JT)が大きかった。これは、学習者と教師のビリーフの差より母語による違いの方が大きいという先行研究の内容と異なる結果であった。

教師のビリーフ調査の結果、日本人であれ、韓国人であれ、言語学習における文化の必要性を強く感じており、日本文化に関する内容を取り入れた授業を行っていた。KTに関する分析に際しては、自国で日本語を教えている非母語話者教師のビリーフの特徴を見るため、岡崎(2001)で明らかになった中国人教師のビリーフ調査結果との比較を行った。その結

果として KT は中国人教師に比べ肯定的な見通しを持って日本語教育に臨んでいることがわかった。JT と KT を比較した場合は、JT は専門などで語学能力を判断するようなステレオタイプの考え方に対しては KT 以上に否定的であり、KT は学習者の自律的学習に対する認識が JT より低かった。また KT のほうが JT より文法や母語、教科書への依存度が高く、教師中心で行われる従来型の教授法を支持する傾向にあった。

韓国人学習者は、教師グループが認識している以上に日本語でコミュニケーションを行うことへの意欲と関心を持っており、日本語学習に対して肯定的で積極的な態度を有していた。正確さに関しては、授業中に徹底的に誤用訂正してほしいと思う学習者と、あまりそう思わない教師グループの間に意見の違いが見られた。しかし、韓国人学習者は、このように正確さを重要視しながらも、外国語が正しく言えるまで何も言っははいけないということには強く反対しており、日本語での会話の途中でわからない語彙がある場合は推測して言ってもいいという柔軟な考えを持っていた。学習者グループと教師グループ全体を見た場合、コミュニケーションの流れを重視する柔軟性は、KT において一番少なかった。

正確さへの拘りは、学習者と教師の差というより、ピラー項目によっては韓国人と日本人の差として現れた。ここには様々な要因が絡んでいると思われるが、教師や学習者が背負っている社会文化の影響がまず考えられる。試験や入試を重視する韓国社会の風潮下で、韓国人学習者はもちろん、教師の方も無意識的に正確さを追求してきたのではないと思われる。第 8 章では本論文のまとめと今後の課題について述べた。

以上が本研究の要約である。

本研究によって韓国人学習者のピラーの特徴、ピラーと学習ストラテジーの関連、学習者ピラーと教師ピラーの違い、ピラーと学習成果の関連など、ピラーに関連する諸相が幾分なりとも明らかになったと思う。今後は本研究を土台にして、ピラー変換への教師の介入可能性についてさらに研究を進めたいと思う。